

もう泣かなくともよい

シリーズ～福音の力～

2020/02/09

ルカによる福音書7章11～17節

それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた。主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と言われた。

そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

「憐れに思い」

- 福音書において繰り返し使われるイエス様の深い憐れみを示す言葉／**腸(はらわた)**を意味する
 - 群衆に対して:「また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、**深く憐れまれました。**」マルコ9:36
 - 盲人に対して:「イエスは**深くあわれんで**、彼らの目に触れられた。すると、すぐに彼らは見えるようになり、イエスについて行った。」マタイ20:34
 - 重い皮膚病に対して:「イエスは**深くあわれみ**、手を伸ばして彼にさわり…」マルコ1:41
 - 良きサマリア人のたとえ(サマリア人)・放蕩息子のたとえ(父親)でも使われている

小説「もう泣かなくともよい」

- 聖書の記述に基づいていますが、所々作者の想像によって脚色されています
- イエス様以外の名前は勝手に作者が付けたものです（聖書には出てきません）

「もう泣かなくともよい」

～ルカによる福音書 7章 11～17節～

ナオミはよく働く女性だった。夫のエゼキエルに先立たれたときには、二度と立ち上がれないほど憔悴仕切っていたが、幼い一人息子ヨナタンのために力を振り絞った。嫁に来た彼女にとっては、身より頼りのない土地だったが、夫の残した土地を息子に継がせるまでは石にかじりついてでもこの町を離れるわけにはいかなかった。刈り入れの季節には朝から晩まで落ち穂を拾い、行事の手伝いや、繕い物、稼ぎになることなら何でもやった。お陰で、小さなナインの町には彼女のことを知らない人はいないほどだった。それでも生活は厳しく、食べるのがやっとだったが、息子にひもじい思いをさせまいと必死だった。そんな彼女のことを町の人々は見捨てなかった。祝い事があると彼女を呼んで余り物を分けてやったり、刈り取りのある畑を教えてやったりしていた。

わが身を振り返る暇もなく、身を粉にして働くナオミにとって、一人息子ヨナタンの成長だけが唯一の喜びであり希望だった。ある日ヨナタンが大きなたんこぶを作って帰ってきた。聞けば、近所のガキ大将に「やもめの子」と揶揄され、石を投げられたという。ヨナタンはやり返したかったが、その子の両親が母に良くしてくれていることを知っていたから、我慢したのだった。たんこぶを見たときには腸（はらわた）が煮えくりかえるほどだったが、相手が分かり、ヨナタンが我慢した気持ちを考えると、ナオミは一気に怒りが失せ、泣きながら、「よく我慢したね」と言ってヨナタンを抱きしめた。そして心の中で、「この子が成人するまでの辛抱だ！」と自分に言い聞かせたのだった。

月日は瞬間に過ぎ、いよいよヨナタンが成人し、正式に父エゼキエルの土地を受け継ぐ日が間近に迫っていた。ナオミはもちろんのこと、町の人たちもその日の来るのを心待ちにしていた。その日が来れば、エゼキエルの死と共に遠縁の手に渡っていた土地が、自分たちの所に戻って来るのだ。ナオミは町の門をくぐる度に、そこで行われるであろう受け渡しの儀式的ことを思い描いていた。ヨナタンは十分に成長し、手伝いに行っている畑でも働き者で有名だった。後は人々が見ている前で、町の長老の宣言を聞くだけだった。そのことを考えると、これまでの苦労は嘘のように消え去り、町の外へと真っ直ぐに続く道は、彼女の、いや彼女たちの明るい未来を指し示しているようだった。

そんなある日のことである。いつもなら、「腹減った！」と言いながら乱暴に扉を開けるヨナタンが、何も言わず座り込んでしまったのだ。「どうしたの？食欲ないの？」と尋ねると、「何だか疲れた。ご飯はいらない」と言う。心配になって額に手を当ててみると焼けるように熱い。直ぐに横にならせて、外に飛び出し、近所の友だちの家に駆け込んで、「息子が急病なの。助けて！」と叫んだ。食事中だったにもかかわらず、その家の夫婦は彼女の家に駆けつ

けてくれた。ヨナタンはぐったりして熱い息を吐いていた。ナインの町には医者はおらず、医者のあるガリラヤ湖畔の町までは半日はかかる。それでも友人のご主人が明日の朝一番で医者を連れに行ってくれるという。ナオミはその夜、一睡もせず、祈りながら朝を迎えた。明け方早く、ご主人が出発した。早ければ夕方には医者連れて帰ってきてくれる。ナオミは、祈りながらその時を待つしかなかった。ヨナタンの熱は一向に下がらず、時々うなされたり、体を引きつらせたりした。やがて太陽が高く上り、西に傾きかける頃、ヨナタンの容態が急変した。意識がなくなり、呼びかけても答えない。ヨナタンの急病のことを聞きつけた近所の人たちも駆けつけ、祈りながらヨナタンの名前を呼ぶが、どんどん体から力が失せていくようだった。ナオミはヨナタンの胸に耳を押し当てながら、繰返し繰返し息子の名前を呼んだ。しかし、部屋の中の闇が濃くなる頃、ヨナタンの心臓は鼓動を止めた。ナオミは息子の名前を呼び続けたが、息を吹き返すことはなかった。

埋葬の朝、ナオミは憔悴しきって立ち上がる力も残っていなかった。近所の女たちはヨナタンの体を丁寧に拭き清めて、新しい布でくるみ、棺代わりの戸板に載せてくれた。町の長老が来たので、近所の男たちが棺の四方を持ってヨナタンの遺体を運び出した。ナオミは近所の女たちに抱えられるようにして家を出た。彼女のこれまでの苦労を知っている多くの人たちが、葬列に加わった。町中に女たちの泣き声が溢れた。普通の葬式ならわざわざ「泣き女」を雇うのだが、今日はその必要はなかった。狭い道を縫うようにして進んだ葬列が町の門にさしかかった時、ナオミはかつて、この門を見ながらやがてくる希望に胸を膨らませたことを思い出した。そして、まるで我に返ったように息子の遺体にすがりついて激しく泣き始めた。男たちが危うく遺体を落としそうになったほどである。「エゼキエルの土地は息子ヨナタンに与えられる！」と長老によって高らかに宣言される日を夢みていたのに…。自分の横で頼もしく胸を張る息子の姿を想像していたのに…。何で息子は白い布に包まれて横たわっていなければならないのか。「ああ、神様！あなたは何と残酷な方なのですか！夫ばかりか一人息子まで奪うとは！私が何をしたというのです！酷すぎます。どうか私の命をここで消し去って下さい！」ナオミは心の中で叫び続けた。しかし何も起こらなかった。

ナオミの心中を察してか、男たちはしばらくそこを動かなかったが、長老たちに促されて進み始めた。ナオミが目を見上げると、門の向こうに真っ直ぐな道が見えた。彼らの明るい未来を指し示しているように見えたあの道である。「あの道の向こうには墓地がある。息子を埋葬するのだ」と思った瞬間、思わぬ光景が彼女の目に飛び込んできた。何やら大勢の人たちが道の向こうからやってくるではないか。このまま門を出れば、あの人たちと鉢合わせしてしまう。しかも彼らは、こちらの葬列には気づいていないようだ。何やら楽しそうに笑い合っている人たちもいる。男

たちはこの場違いな集団をいぶかりながら、それでも門を出て行こうとした。向こうからやって来た集団もようやくこちらの葬列に気づいたのか、一斉に歩みを止めた。イスラエルでは、死体は汚れたものである。死体に触れたら一日中人との接触が禁じられる。町の人たちはそれを覚悟で葬列に加わってくれているのだが、町の外からやってきた人々にとってはいい迷惑である。あれほど楽しそうに会話していた人々が一気に押し黙ってしまった。後ずさりする者もいる。彼らの動きを目で制しながら、男たちは棺を担いで進んでいった。ナオミは彼らの目を避けるように、しかし棺のそばを離れることなく何とか歩き出した。

その時である、人々の中心にいた人物が、何事もなかったかのようにこちらに向かって歩いてきた。そしてナオミの側まで来ると黙ったままナオミを見つめていた。ナオミも思わずその人の目を見てしまった。吸い込まれるような澄んだ瞳だった。その瞳が一瞬潤んだように見えた時、その人はナオミに、「もう泣かなくともよい」と優しく言われた。ナオミはあまりに突然のことで、何と言われたのか分からなかった。呆然とするナオミを横目に、その人は棺に近づいて行った。そして何と布にくるまった息子に触れたではないか。担いでいた男たちも驚き立ち止まった。遠巻きにしていた人たちからも「おう！」という驚きの声が上がった。するとその人は、先ほどナオミに話しかけた時とは別人のような威厳に満ちた大きな声で、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言った。この人は何を言いだすのだろう、と周りの人々があっけにとられた瞬間、信じられないことが起こった。何と、息子を包んでいた白い布が起き上がったのだ！言葉にならない叫びが、棺を取り巻いていた人たちから起こり、そして葬列と町に近づいてきた人々が騒然となった。棺を担いでいた男たちは、突然白い布が動き出し、何やら声を発し始めたので、驚きの余り固まってしまった。皆が見つめる中、白い布から手が出て、頭が出てきた。そして、キョロキョロと周りを見渡すと、ナオミを見つけて「お母さん、おはよう！」と言った。息子を生き返らせたその人は、彼を棺から下ろして立たせると、肩を組むようにしてナオミの所に連れてきた。キョトンとする息子の横で、その人は優しく微笑んでいた。まわりにいた人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

悲しみの葬列は、歓喜の行列に変わった。町にやってきた人々も入り乱れて小さなナインの町は大騒ぎになった。町の門の広場は、さながら宴会場ようになった。人々が飲み物や食べ物を持ち出して、この町の憐れなやもめを救い、吊いの町を祝宴の町に変えてくれた張本人、そうイエスとその一行をもてなそうとしたからだ。ナオミはまるで夢の中にいるようで、何度も息子の手を握りしめ、その顔を見上げた。「夢じゃない。この子は生きている。でも、このお方は一体何者なのだろう。死人を生き返らせると

は。」ナオミは何度も心の中でつぶやいた。そして思い出した。息子の遺体と共に町の門を出ようとした時心の中で叫んだ言葉を。「ああ、神様！あなたは何と残酷な方なのですか！夫ばかりか一人息子まで奪うとは！私が何をしましたというのです！酷すぎます。どうか私の命をここで消し去って下さい！」あの叫びが神に届いたのだろうか？もしそうだとしたら、この方は神の使いに違いない、ナオミはそう確信したのであった。

ナオミの確信は当たっていた。この方、つまりイエスは神の使いであった。しかしそれだけではなかった。実は彼もやもめの子だったのだ。しかも隣町ナザレの大工だった。彼はナインの町に近づいたとき、誰よりも早く葬列が町を出ようとしていたことに気づいていた。そして棺のそばに、誰かに抱えられるようにして歩いている女性に気づいていたのである。明らかにやもめと分かるその身なり、そして葬列の状況から、一瞬で亡骸はやもめの一人息子だと見抜いていたのだ。自らもやもめの子であり、長男であったイエスは、彼女の悲しみと絶望を感じ、腸（はらわた）が揺り動かされるほど深く同情した。同時に、体中にみなぎる聖霊の力を感じ、思わず遺体に触れ、「起きなさい」と命じてしまったのだ。だが彼は知っていた。これは決して特別な出来事ではないことを。人の世が続く限り繰り返される悲劇であると言うことを。

イエスは歩いていた。自らの命を奪う道具を担いで。嘆き悲しむ女性たちが大きな群れをなしてイエスに従った。イエスは婦人たちの方を振り向いて言われた。「エルサレムの娘たち、わたしのために泣くな。むしろ、自分と自分の子供たちのために泣きなさい」（ルカ 23:27-28）そして「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、人々はイエスを十字架につけた。激しい痛みを襲われながらイエスは叫んだ。「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです。」議員たちや律法学者たちは彼をあざけり、「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」と言った。昼の十二時頃、突然辺りが真っ暗になり、三時頃まで続いた。イエスは「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」と大声で叫ぶと、息を引き取られた。ガリラヤから従ってきた女性たちは、遠くに立ってこの一部始終を見つめていた。

彼らは知らなかった。イエスが神の一人息子だと言うことを。彼は人間を死に至らしめる罪の罰を、全人類に代わって受けられたのだ。神は、イエスを通してやもめの一人息子をよみがえらせたが、ご自分の独り子を見殺しにしたのだ。しかしそれは、彼を見上げるすべての人が、再び神の元に帰るための道を作るためであった。十字架は人類の究極の悲しみを、完全に癒すための唯一の方法であった。十字架を通して神は、すべての人たちに語りかけておられます。「もう泣かなくともよい」。